九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後北部九州のサークル運動における文学 ： 「サークル村」を中心として

茶園, 梨加

https://doi.org/10.15017/1440990

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

論文審査等の結果の要旨

本論文は、戦後文化運動の代表的事例「サークル村」について、背景となる文学集団や文学活動の検討を通じて再考し（第一部）、その創作方法の特色や問題の検証（第二部）を目的としている。1950年代から60年代にかけての戦後文化運動で、情報誌の機能を持ち、表現の場ともなったのがサークル誌である。多くはガリ版で発行され、他のサークルとも交換されたサークル誌を支えた人々の表現活動の実態を具体的に把握するためには、関係資料の調査や整理（資料編）を行うことが不可欠で、本論文では、それを「日炭高松」、「広報水巻」、「月刊たかまつ」、「山田文学」などを中心に行っている。そうした資料調査を踏まえ、本論文は、所期の目的について以下のように考察している。

本論文の構成は、序章、「第一部　サークル運動における文学の役割」（第一章～第三章）、「第二部　サークル運動の内と外」（第四章～第六章）、終章から成る。第一部がサークル活動を中心とした分析であるのに対し、第二部は「サークル村」の代表的な作家の作品が中心的な分析対象になる。

序章では、戦後文化運動とサークル運動および「サークル村」についての概観、本論文の問題設定、本論文に関する先行研究の整理と紹介を行っている。

第一章「日炭高松におけるサークル運動」は、日炭高松（遠賀郡水巻町）における文化活動の諸相を職場機関紙や会社側・行政側の機関紙「日炭高松」や「広報水巻」なども含め重層的に捉え、そうした環境下でのサークル誌活動が「サークル村」を醸成する土壌であったと位置づけている。

第二章「文学サークルの展開と、その表現―「山田文学」の場合」では、サークル運動を論じる上での焦点の一つである労組とサークルの関係について、「山田文学」を事例に、その関係性が、芸術性と大衆性や表現の志向性など、種々の葛藤や矛盾としてサークル誌に内包されていることを指摘している。

第三章「労働闘争のなかの文学―三井三池と文化運動」は、戦後労働運動の転機となる三池闘争を背景に、三池における文化運動の諸相を検討し、「サークル村」に三池の労働者が参加しない理由を労組の影響として解釈した。

第四章「上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人」は、炭鉱と「アリラン租界」の関係、およびサークル運動と朝鮮人問題について考察し、その関係性の稀薄さに当時の国民文化運動としての性格が反映していることを指摘した。

第五章「森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」と「狐」の関連から―」は、聞き書きが集団創作の一要素であり、それが「狐」など詩のジャンルの発想にも関係することを指摘した上で、森崎の創作活動全体を特色づける方法として考察している。

第六章「石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程」は、「サークル村」が石牟礼道子の創作に与えた影響を、集団創作として行われた聞き書きの方法化とその展開として検証している。

終章では、各章のまとめを行い、戦後文化運動が無名の労働者の主体化や労働観の形成などを考える格好のフィールドであることを確認し、今後の展望と課題として、現在の雇用やエネルギーなどをめぐる観点からサークル誌の再考が必要であることを述べている。

資料編には「月刊たかまつ」、「山田文学」、「辺境」・「兄弟」の目次・解説を収録した。

本論文は、戦後文化運動におけるサークル誌運動の代表的事例である「サークル村」の生成について、先行するサークル活動が果たした役割を資料面から検証するとともに、サークル誌における表現活動の実態をサークル間の動態的関係という巨視的視点から捉えるとともに、「サークル村」関係者の作品の表現を対象にした微視的分析によって明らかにしている。また、一次資料であるサークル誌の資料報告も戦後文化運動研究への寄与が大きいと判断される。

以上により、本論文は博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な内容を持つと判断した。

最終試験の結果の要旨	
甲　　第　　号	氏　名　茶園　梨加
調　査　委　員	主査　九州大学　松本　常彦 副査　九州大学　鏑木　政彦 副査　九州大学　波潟　剛 副査　北海道大学　水溜　真由美 副査　早稲田大学　鳥羽　耕史

最終試験の結果の要旨

九州大学大学院比較社会文化学府の命により、平成26年2月3日（月）16時30分から18時30分まで、比文言文棟第2セミナー室を会場に茶園梨加氏の博士学位申請論文（比較社会文化・甲）の公開審査を開催した。最初に、主査が委員の紹介を行い、当日の審査の次第について説明した。申請者による論文概要の説明を受け、各委員との間で質疑応答を行った。約2時間に及ぶ公開審査で、申請者は各委員の質問や意見にも的確に応じた。論文内容および公開審査の応答を踏まえ、合議の結果、委員全員一致で申請者が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な資質と知見を有すると判断した。